

2026年春季大会企画講演 アンケートの集計結果

2026年8月7日
第81期研究環境検討委員会

アンケート対象者: 日本物理学会会員

アンケート回答期間: 3/18(水)～3/30(月)10時及び4/2(木)～4/10(金)15時

アンケート回答数: 81件

【アンケート回答者に周知事項】

・アンケート結果は、日本物理学会の研究環境検討委員会のホームページに掲載することがあります。

また、研究環境検討委員会で検討し理事会の承認を得た上で、有効活用していただける機関
(招待講演者の日本学術振興会、日本経済団体連合会、他)

に本アンケートの集計結果と匿名化したデータを提供することがあります。

・日本物理学会は、同学会のプライバシーポリシー(<https://www.jps.or.jp/privacypolicy.php>)に則り、
収集した情報を研究者の研究環境改善の検討の目的以外に使用いたしません。

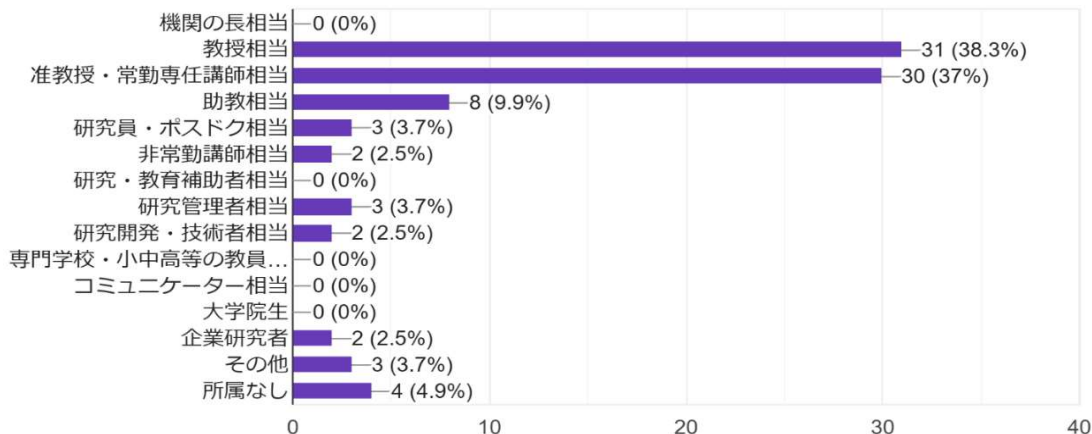
収集したデータは匿名化され、個人を特定できる形で公表されることはありません。

1. 2026年春季大会企画講演「科研費改革2028の最新動向：アカデミアと産業界の役割」において、小川氏と木須氏の講演を聴講しましたか？

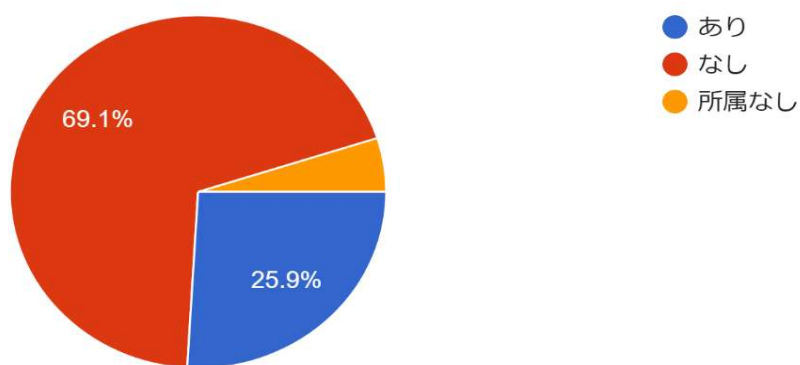


回答者の情報に関する設問

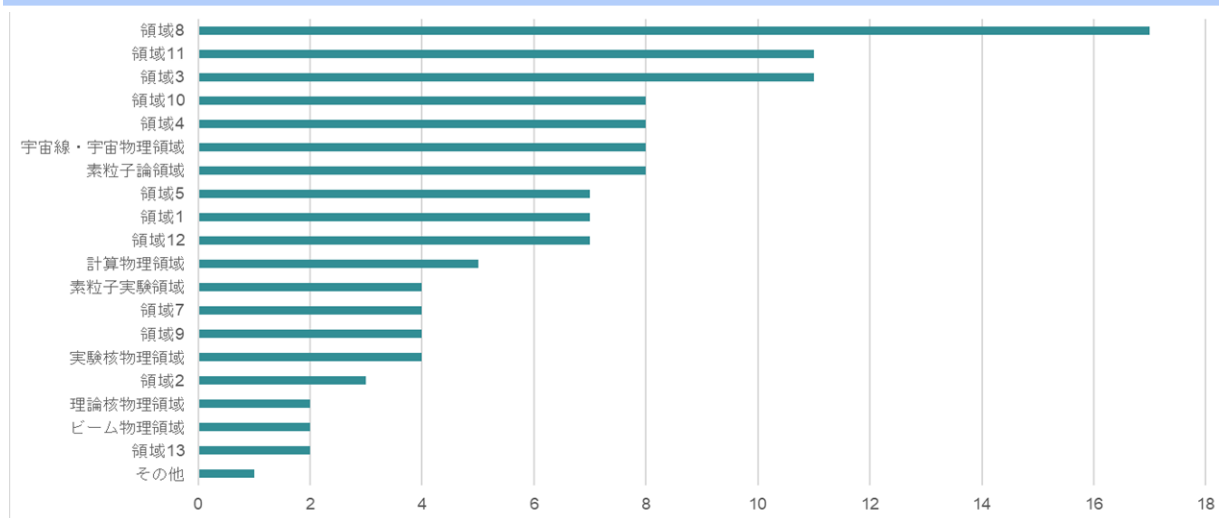
2-1. 職位を最大2つまで回答してください。



2-2. 現職の任期を回答してください。

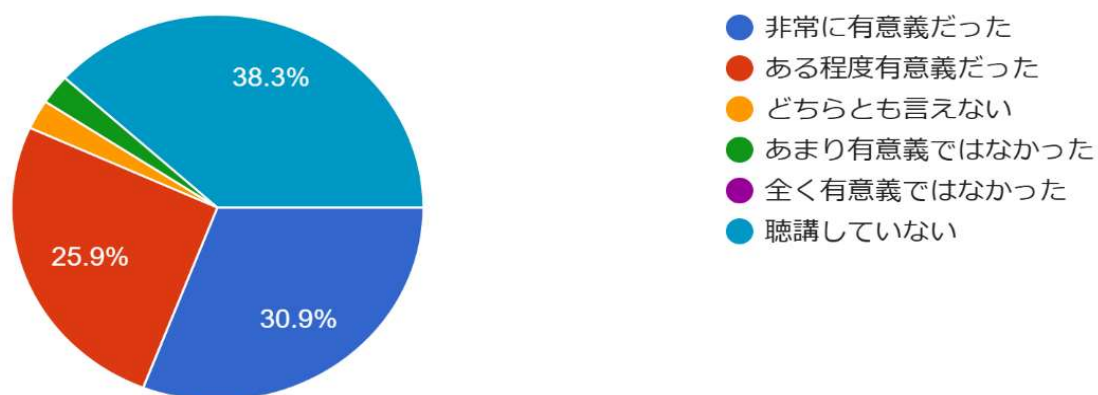


2-3. 日本物理学会で活動している主たる領域を、最大2つまで回答して下さい。

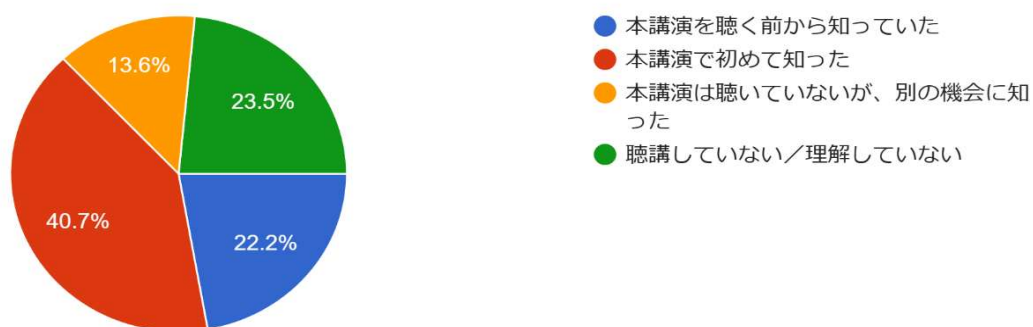


小川尚子氏（一般社団法人日本経済団体連合会産業技術本部長） の講演に関する設問

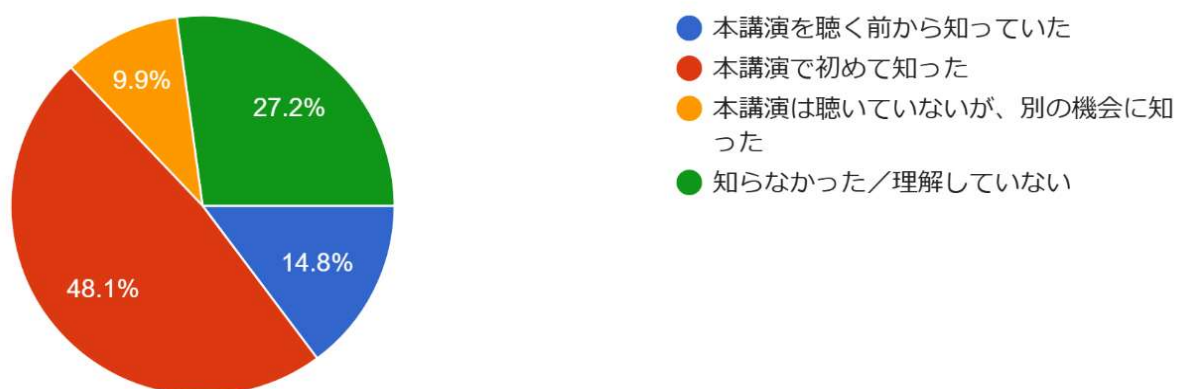
3-1. 企画講演に関する感想を回答してください。



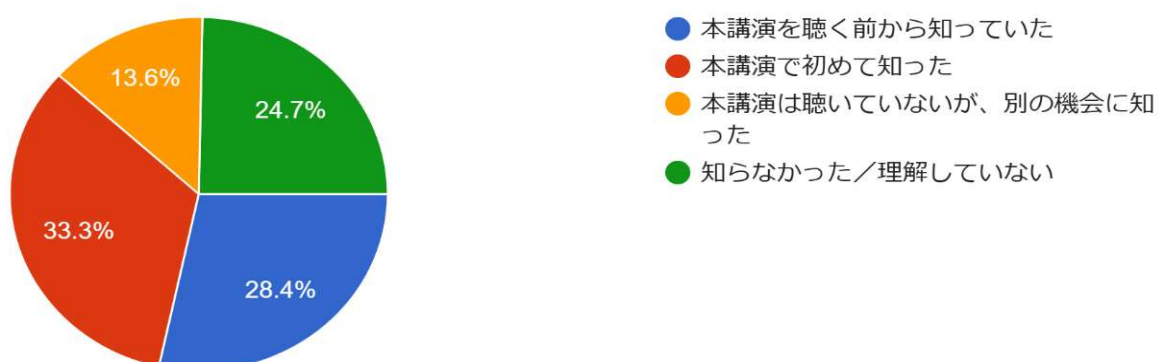
3-2. 経団連から「国立大学の運営費交付金の増額」を求める提言があったことをご存じでしたか？



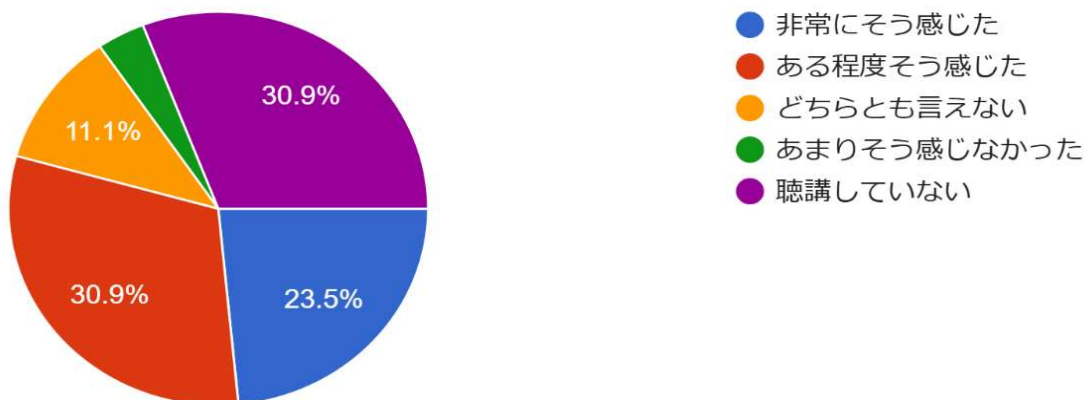
3-3. 経団連から「科研費の早期倍増」を求める提言があったことをご存じでしたか？



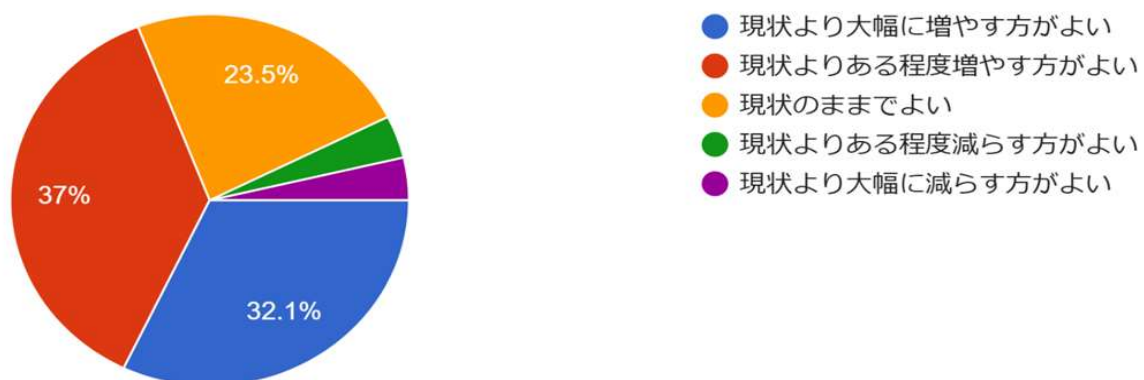
3-4. 経団連から「博士人材の育成」を求める提言があったことをご存じでしたか？



3-5. 本講演の内容は、今後の研究環境や科学技術政策の方向性を考える上で参考になりましたか？



3-6. 学术界と経団連の交流の機会について、どのように考えていますか？



3-7. 学術界と経団連の今後の関係について、期待することを200字以内でご自由にお書きください。

自由記述では、「学生の支援・キャリア構築について」、「経団連との交流のあり方について」、「研究支援について」、の意見が多数ありました。以下にいくつか掲載します。

「学生の支援・キャリア構築について」

1. 経団連が積極的に博士課程進学およびその支援、さらに科研費の増額などを提言してくれることは非常に有用なことと考える。今後もさらにこれが進み、博士進学者の増加および研究費の増額につながることを望む。
2. 現在、修士学生はほぼ1年間就活している状況にあるので、研究費の問題だけでなく、大学院生がもっと研究できるように採用方法を改善して欲しい。
3. 理工系の博士号取得者の安定的な雇用確保について協力していただきたいです。研究課題を探している学生や研究者に対し、企業から研究課題の提示をできないでしょうか。コンペ方式や奨学金方式など色々な方法があると考えます。

「経団連との交流のあり方について」

4. 学術が健全に発展する方向の関係は歓迎
5. 学術研究、特に意義が世間的に理解しづらい基礎研究の大切さを経団連に理解してもらえるよう説明をし、その結果、今回のように経団連に学術界を応援してもらえるような関係性が望ましい。その一方で、学術界の自由さが一定程度担保されるようにすることも重要だと思う。
6. 本来、学術界は他から独立であるべきなので、過剰に接近しない方が良い。一方で、教育の側面からは（例えば物理を学んだ高校生・大学生が、"半導体"が身の回りのどこでどの様に使われているのか答えられない等）産業界・経済界と連携の上、あるべき姿を模索するのが良い。
7. 今回の講演を聞いて、経団連が学術会を後押ししてくださる姿勢であることを知り、非常に心強かった。今後さらに目先のことでなく長期的視点に立ったパートナーシップの未来像が描けることを期待している。

「研究支援について」

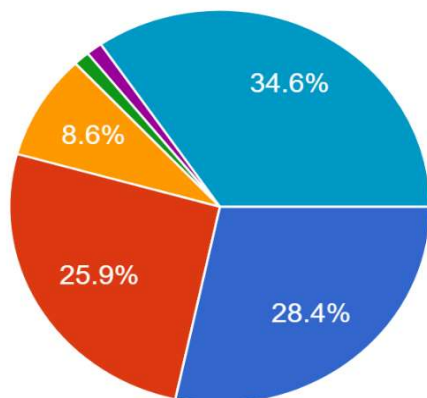
8. 学術界の方から経団連側への研究紹介などを通じ、基礎研究を中心に運営・研究予算の増額をはかっていただけると助かります。
9. 最近、大学で行った研究成果の社会実装を求められることが多く、またその実施件数が大学全体への運営費交付金の額を決める要因の1つとなっています。しかしながら、研究者個人は企業経験がなく、なかなかアイデアがありません。企業の方が学会へ参加していただけると、新たな産業応用の芽を見つけてもらいやすくなるのでは、と勝手ながら期待します。

「その他」

10. 学術界と経団連の結びつき、というより交流は、もっと活発である方が良いと思うが、学術界も旧帝・国公立・私立の違いや、関東中部関西の大都市部と地方では役割や実体が大きく異なる。そこを見ずに学術界という形でひとくくりにすると適合しないところは苦しくなるし、学術界内での格差は今よりずっと悪化すると思う。

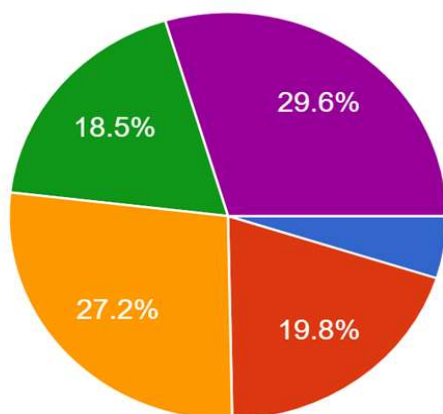
木須隆暢氏（九州大学大学院システム情報科学研究院主幹教授）
の講演に関する設問

4-1. 企画講演に関する感想を回答してください。



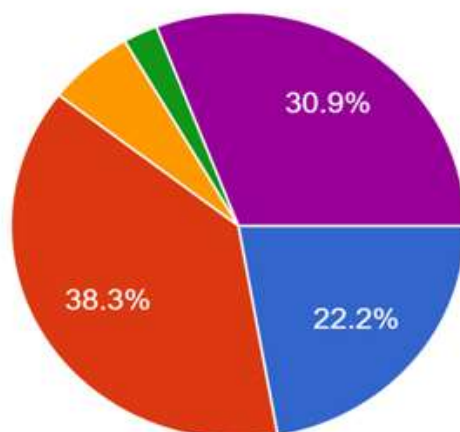
- 非常に有意義だった
- ある程度有意義だった
- どちらとも言えない
- あまり有意義ではなかった
- 全く有意義ではなかった
- 聴講していない

4-2. 講演を聴く前に、科研費改革2028の動向についてどの程度理解していましたか？



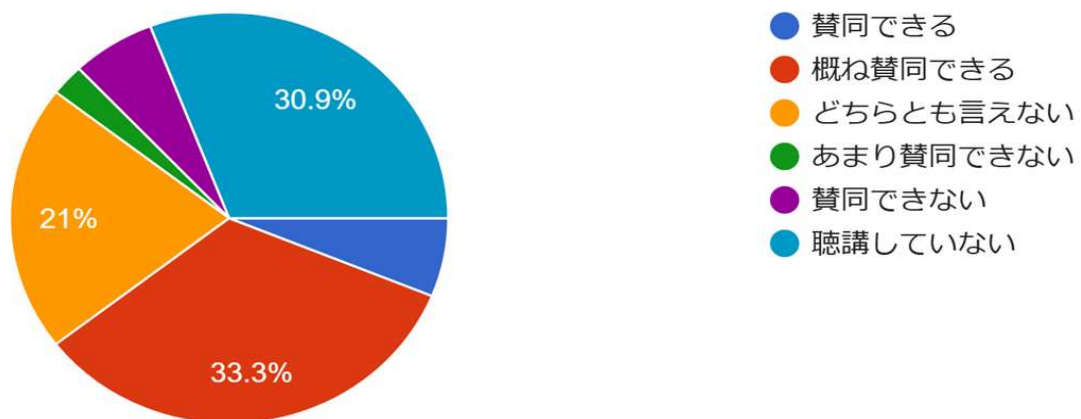
- 十分に理解していた
- ある程度理解していた
- あまり理解していなかった
- ほとんど理解していなかった
- 聴講していない

4-3. 本講演を聴いて、科研費改革2028の制度や方向性についての理解は深まりましたか？

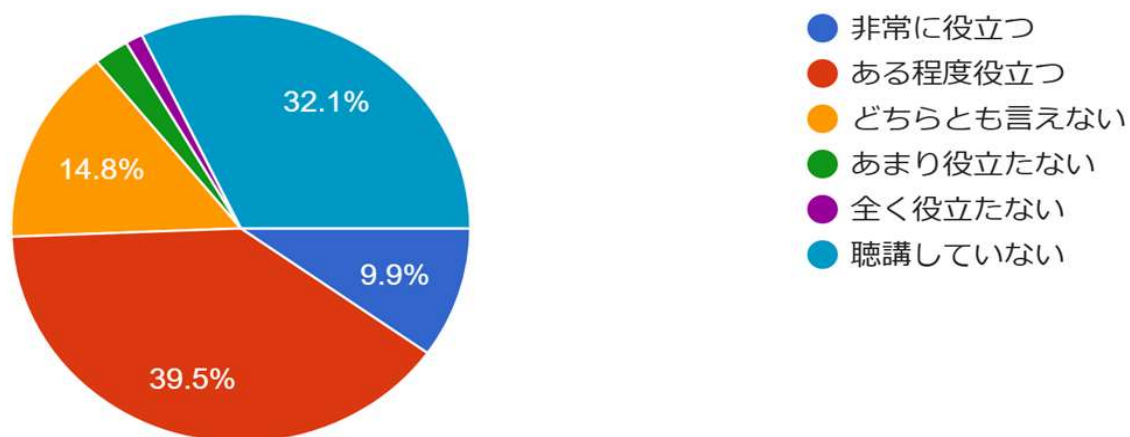


- 大いに深まった
- ある程度深まった
- あまり深まらなかった
- 全く深まらなかった
- 聴講していない

4-4. 本講演を聴いて、科研費改革の制度や方向性についてどのように感じましたか？



4-5 本講演の内容は、今後の科研費申請や研究活動の進め方を考える上で役立つと感じましたか？



4-6. 科研費改革2028について思うことを200字以内でご自由にお書きください。

自由記述では、「科研費改革2028について」、「科研費制度について」、の意見が多数ありました。以下にいくつか掲載します。

「科研費改革2028について」

1. 毎年応募時に調べるため、毎年の制度改革と、大型改革について知っている。よりよくする改善が重ねられ、科研費はとても良い制度と感じている。若手にとっては採択による資金以上に、採択実績が重要である。現在の公正なピアレビューが今後も保たれると嬉しい。
2. 改革の方向性がトップダウン・ボトムアップ双方から示された点は高く評価します。しかし過去20年が示す通り、優れた提言も財務省が予算を許さない限り実現しません。日本の科学の行方は、国が科学をどう位置づけるかにかかっています。正攻法の改革案提示にとどまらず、財務省を説得し実質的な予算を勝ち取るための、政治的・官僚機構に対する戦略的な働きかけも強力に進めていただくことを強く要望します。
3. 改革自体には賛同できるが、基盤的研究資金と競争的研究資金の本来のあり方を中心として、過去30年の失敗の本質に切り込んではいけていないように感じた。科研費の本来のあり方に立ち返るための取り組みも併せて必要かと思う。
4. 僅かな改革という印象である。もっと大きな（抜本的）変化があるべき。若手ばかり手厚くするのではなく、全体を手厚くするべき。

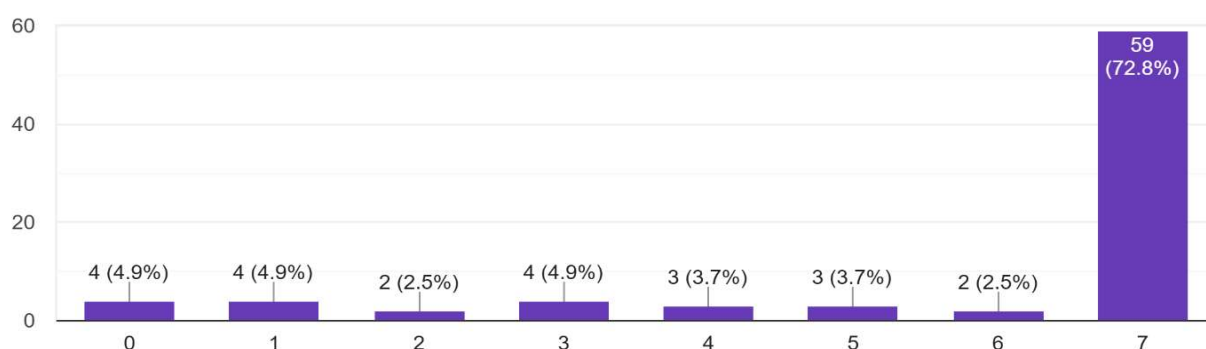
「科研費制度について」

5. 聴講していませんが、現在の科研費には2つの大きな問題があると考えます。それは、ピアレビューゆえに人口に膾炙するテーマほど研究費をとりやすいという点と、申請・審査に膨大な労力がかかる点です。業績に一定の条件を付けたうえで、ピアレビューではなくランダムに配分した方が、新たな科学の芽は育っていくと思いますし、申請・審査の労力を大幅に削減できます。
6. 重複応募に関しては緩めていくべきとは考えているが、ピアレビューによる審査員の負担を懸念されていたので、AIを活用することも視野に入れていただければと思う。
7. 少し前から国際性重視となっているが、海外との共著論文があることや海外の研究協力者がいることが重視され過ぎていないか懸念している（実績報告書にもそのような欄がある）。真にオリジナルな研究は海外との共同研究にできないことも多く、むしろ将来的なノーベル賞などにつながるはずである。そのような研究を、流行に左右されずに基盤Bクラスの研究費で花開くよう支援することは、ボトムアップ型の趣旨からして重要だと思う。
8. 科研費の大枠的な仕組みの改革も必要だが、採択率や配分額、種目ごとの申請額上限の改善を希望します。
9. 運営費交付金が増えないならば基盤Cの採択率を90パーセント程度に引き上げるべきだと思う。大学教員は研究を行うことを前提として大学に採用されているのに、それが研究費の問題で実施できない状況に追い込まれることがあることはそもそもおかしいと思います。この点に留意した改革の方向性も打ち出してほしい。
10. 博士学生が20年で3割減り、若手の数も減っていて実際若手研究の採択率は既に4割。今はそちらの枠を増やすのではなく、採択率が3割弱の基盤研究を拡充すべき。地方大では大学から交付される予算は研究室の電気代だけで消えてしまうところも少なくなく、基盤Cの有無が研究できるかどうかの生命線。それを運営費交付金の役割と言うのは簡単だが、そこがすぐ改善するわけではないので、少なくともそれまでは基盤が担うべき。

科研費のあり方についての設問

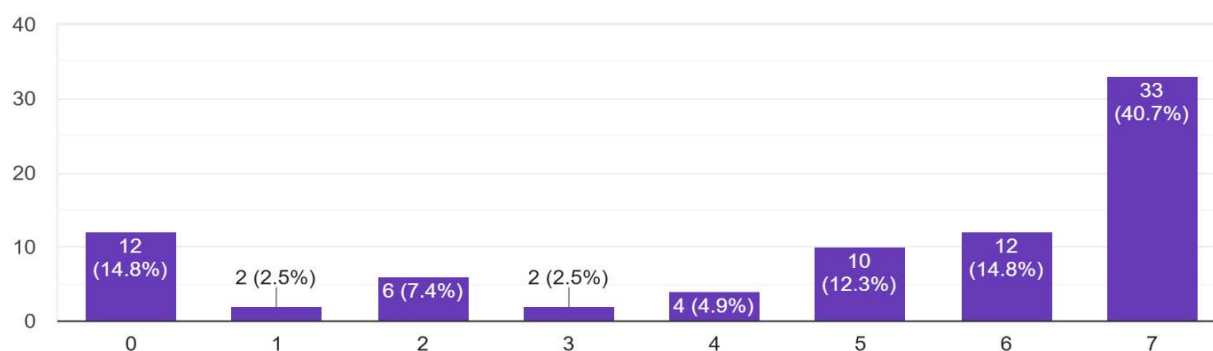
5-1. 過去7年度（2019年度～2025年度）のうち、科研費の応募資格を有していた年度の数を選んでください。

※種目、新規・継続、代表・分担は問いません。

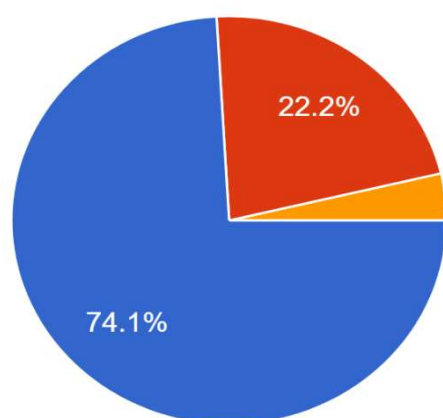


5-2. 過去7年度（2019年度～2025年度）のうち、科研費の支援があった年度の数を選んでください。

※種目、新規・継続、代表・分担は問いません。



5-3. 科研費の採択率の目標値30%についてどう思いますか？



- もっと高い方がよい
- 適切だと思う
- もっと低くてよい

5-4. 科研費の採択率の目標値30%について「もっと高い方がよい」あるいは「もっと低くてよい」をお選びの方は、希望するパーセントとその主な理由を100文字以内でお書きください。

採択率のパーセントに関する理由について、以下にいくつか掲載します。なお、現状維持で問題ないと思われる方からは意見をもらっていません。

「希望採択率10%-15%の理由」

1. 10%。科研費等の競争的資金を減らす代わりに基盤的資金を増やした方が科学の進歩に寄与するため。
2. 15%程度。科研費若手研究は個々の研究に対して広すぎに思えるので、予算を絞ってチームアップを前提とした若手向きの中規模予算（昔の若手Aのような）の構築が望まれる。

「希望採択率40%-60%の理由」

3. 40%程度。審査をされていて半分から上かどうか、は質的な差ですぐ分かるような気がする。30-50の間は評価者によるばらつきが大きい。
4. 50%。採択率が低いと研究が途中で途切れるため、「独創的・先駆的な研究」と言いつつも、結局、短期間で成果の出るテーマになるから。
5. 50%程度。「選択と集中」は世間への聞こえは良いが、大事なのは研究の多様性と裾野を広げることであり、「広く浅く」最低限の研究資金を分配しないと、経団連の講演であったような本当の意味での良い研究成果は生まれない。
6. 基盤Cは採択率を50%くらいに上げた方がよい。地方大学では基盤的予算がないため。研究ができないと、卒業生の質が確実に下がるため。
7. 60%。申請書が真剣に書かれているという前提に立てば、そもそも1/3程度しか通らないことが妥当か疑問。運営費交付金では十分な研究費にならない中で、まとまった公的資金の受給確率が1/3程度というのはこれから研究者を目指す学生にとっても不安だと思われる。

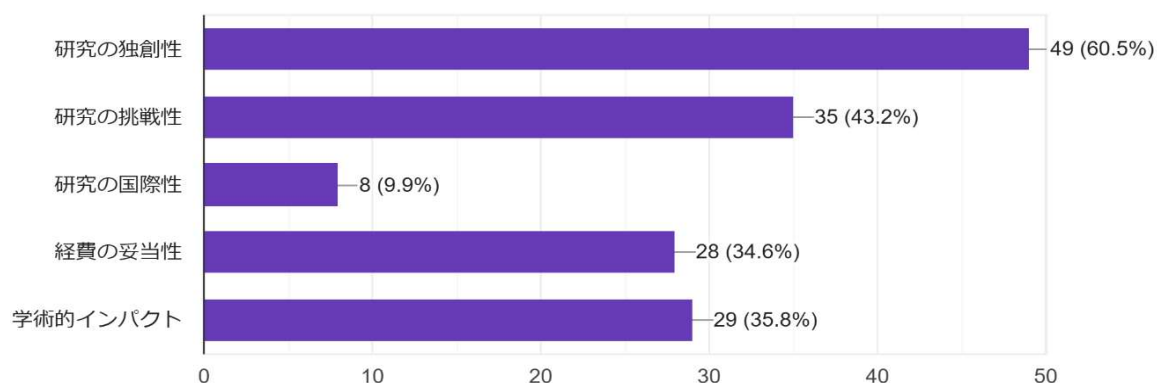
「希望採択率70%-100%の理由」

8. 70%。審査結果を見ていると、公平性というのが研究の質に合っているか疑問な部分がある。定評のある査読付き論文誌にコンスタントに論文を出している研究者には、配分に傾斜をつけても良いから全員に配分してほしい。
9. 理想は90%。少額での採択を増やしていただきたく感じています。大型は10%から20%でも良いですが、併願制度があると大型にチャレンジしやすいと思います。
10. 100%。科研費は幅広く配分すべきである。将来どのような研究が必要になるのか、それを現在の人で決めていいのか。多額の研究費を1人に配るというよりは、少額の研究費を全員に配分した方がましである。

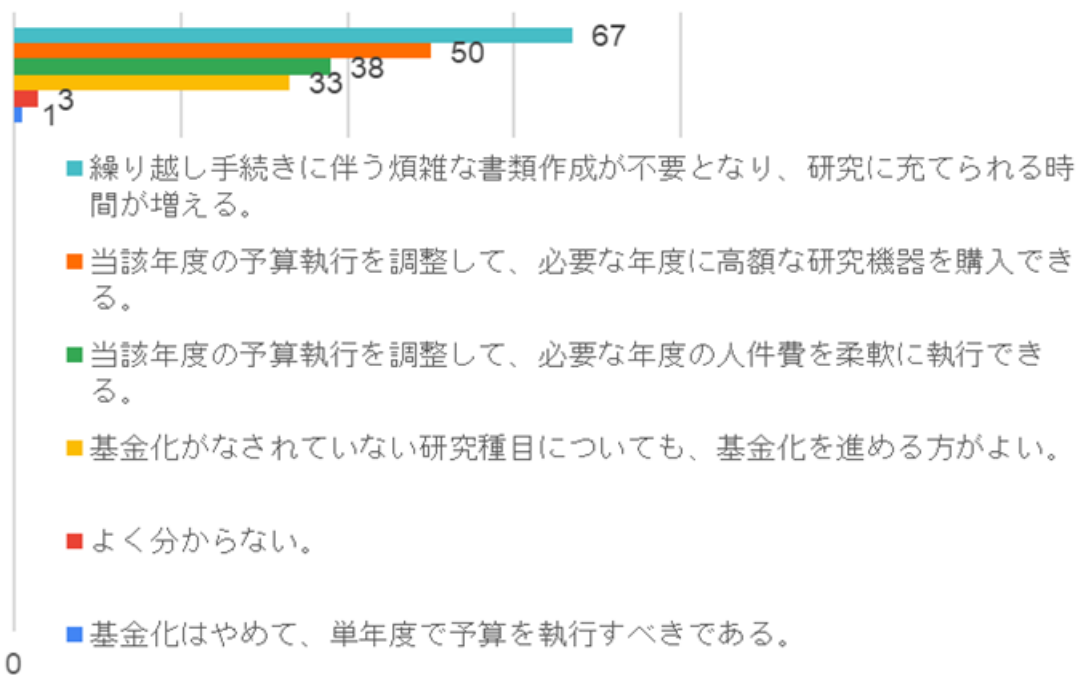
「具体的な数値なし」

11. 科研費の新規採択率30%という目標は一步前進ですが、現場の実感としてはなお不十分であり、より高い水準を目指すべきです。各教員に配分される運営費が10万円台にとどまる現状では、日常的な研究活動や萌芽的研究の立ち上げすら困難です。基礎研究力を維持・強化するためにも、基盤的経費の大幅拡充とあわせて、科研費採択率を大幅に引き上げる改革を期待します。

5-5. 科研費の充足率を変動させる場合の重視すべき評価基準を最大2つまで回答してください。



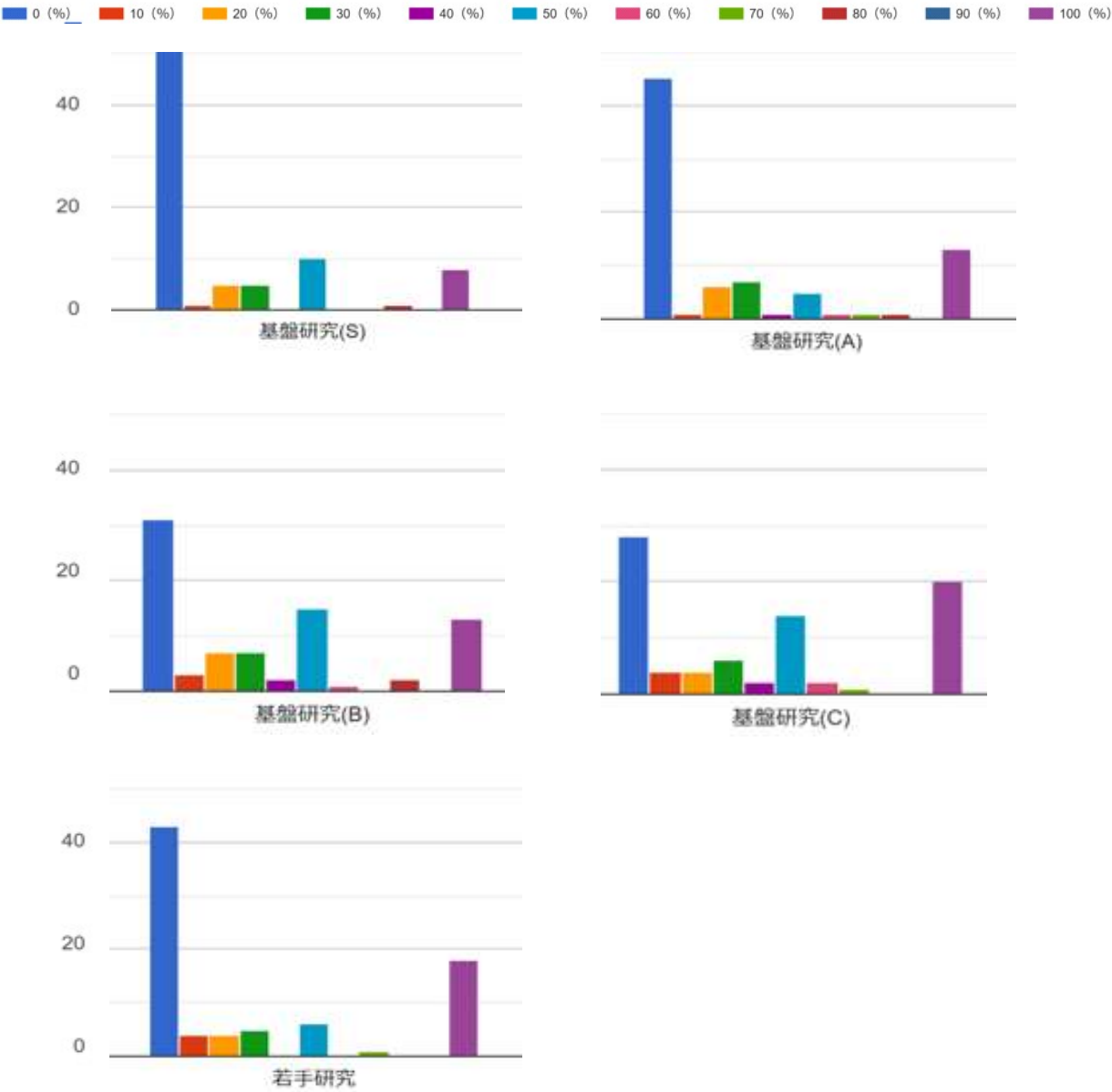
5-6. 科研費の基金化に対してどのように考えていますか？次の項目から当てはまるものを最大4つまで回答してください。



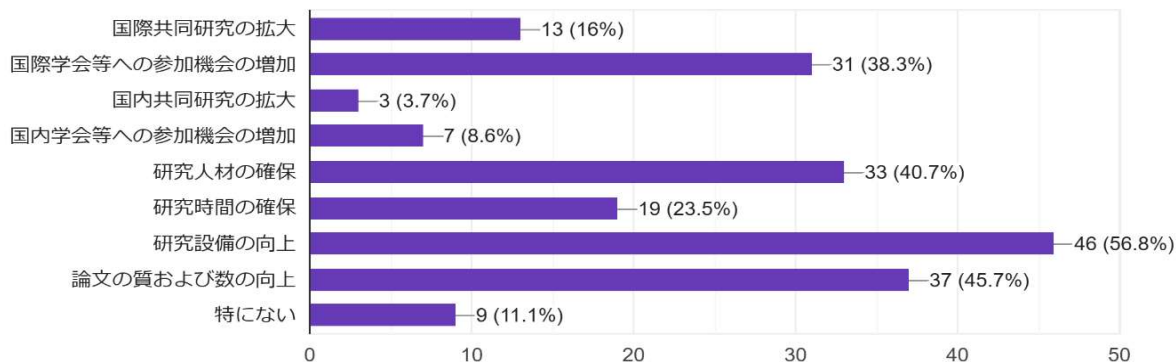
5-7. 科研費のうち、上限の引き上げが必要だと思う研究種目を最大5つまで選び、希望する引き上げ率（0～100％）を回答してください。それ以外は、0％を選択して下さい。

【現行の上限額】

- ・ 基盤研究（S）：2億円以下
- ・ 基盤研究（A）：5,000万円以下
- ・ 基盤研究（B）：2,000万円以下
- ・ 基盤研究（C）：500万円以下
- ・ 若手研究：500万円以下



5-8. 科研費の上限を引き上げた場合、どのような効果が期待されますか？最大3つまで回答してください。



5-9. 科研費のあり方（理想とする科研費の配分構成、科研費の使いやすさ、改善点など）について、考えていることを200文字以内でご自由にお書きください。

自由記述では、4-6に引き続き「科研費制度について」、「科研費の使い方について」、「審査制度について」、の意見が多数ありました。以下にいくつか掲載します。

「科研費制度について」

1. 本日議論のあった、重複制限の撤廃は必要だと思う。挑戦的なアイデアがあっても、当たらなかった時に翌年の研究がストップしてしまうリスクは避けなければならないと考えて、その研究アイデアが埋もれたり他国で先にやられてしまったりする機会損失は、可視化出来ないが実は大きいはず。
2. 研究者の自由な発想に基づくオリジナルな提案を重視し、弱体化してきている日本の研究基盤を固めるように裾野を広げるべきである。流行の後追いにつながるような国際性重視の仕方は避けてほしい。
3. 間接経費を取られすぎ。そのような経費はそもそも交付金で手当てされているべき。
4. 科研費で研究時間の確保はほぼできない。結局、書類仕事は増える。（AI 利用などでの効率化を除いて。）基盤S、A（、B）等の上限を挙げて、Cは逆に下げてでも採択率を上げて、ある程度、所属大学や地域に依存しない研究環境（といってもお金の面だけだが）の統一は必要。とくにいわゆる「地方」にある大学の研究者は国外だけでなく国内研究での集会参加にも移動日数と旅費がかかるので。
5. 科研費のあり方として重要なのは、配分額そのもの以上に、研究者が実際に研究に向き合える時間を確保できる制度設計です。申請・経理・報告に伴う事務負担が過大で、限られた研究時間が奪われています。基金化や手続きのさらなる簡素化、大学事務支援体制の強化を進め、研究者が本来の研究活動に専念できる仕組みへ改善すべきだと考えます。

「科研費の使い方について」

6. 科研費の使いやすさについては、大学の問題が大きく、かなり面倒で手間のかかる使い方を強要する大学も見られる。特に地方大や私立大では不正防止について神経質になりすぎている。実際、現行大学に移ってから発注から納品までの時間は3倍程度に増え、資金管理に要する時間も2倍程度になった。使い方や管理方法について具体的な指針を出してもらえるとありがたい。
7. 他の事業予算と比べると圧倒的に使い易くシステムが確立されていると思います。
8. いまの配分構成でそれほど問題は無い。ただ、論文をオープンアクセスにするのに必要な費用が基盤(C)ではもはや賄えない。リポジトリの利用拡大を明確にすべき。

9. 基金化で複数年に渡り科研費を柔軟に使用出来るのは使いやすさの面で素晴らしいと思う。

「審査制度について」

10. 基礎科学の物理分野では審査の小区分ごとで採択難易度がかなり異なる様に見える。ある人は直近10年間で殆ど論文がないのに採択され、ある人はコンスタントに定評のある学術誌に査読付き論文を出しても基盤Cですら全く当たらない。何回も当たる人と殆ど当たらない人で研究の質や数が大きく違うとも限らない。審査の小区分に分けて、過去5～10年間の応募者ごとの採択回数の統計を取って、傾向を理解してから改革をして欲しい。

「その他」

11. 日本の国力が相対的に低下しているのでこれまで通りの支援額では立ち行かなくなっている。この現状を打破するには、科研費の大幅な増加が必要な状況であることを政府関係者に働きかけるのは重要なことである。